

平成 27 年度卒業論文

日本人の宗教意識と代表制デモクラシーへの信頼の関係性

12218020 長岡 将

山形大学 地域教育文化学部
地域教育文化学科 システム情報学コース

指導教員 濱中 新吾

目次

1. はじめに	2
2. 先行研究	3
2-1. 概観	3
2-2. 政治と宗教の実証的研究	4
2-3. 日本における政治的態度の測定	6
2-4. 日本人の宗教意識	7
3. 分析	8
3-1. 整理	8
3-2. 分析	10
3-3. 理論付け	12
4. 結論	16
4-1 結果のまとめと考察	16
4-2. 今後の課題	17
謝辞	19
参考文献	20
付録——使用した変数	23

1. はじめに

社会科学の領域における近年の重要なテーマとして「価値観」が挙げられる。1980年代以降では世界価値観調査(World Values Survey)を始めとして、ヨーロッパ価値観調査(European values survey)や国際社会調査プログラム(International Social Survey Programme)など、人々の価値観というものに焦点を合わせた大規模な国際比較調査がされるようになった。これらは欧米諸国などで始められているため、宗教を対象として調査が行われることが少なくない。欧米諸国においては「人びとの宗教一般あるいは特定の宗教にかかわるものの見方・考え方・感じ方・行動の仕方」と定義されている宗教意識というものがそうした質問紙調査の中心に位置づけられ、その結果として宗教意識が人々の価値・信念・態度とよく結びついていることが検証されてきた。

一方、日本人については宗教意識が人々の価値・信念・態度と結びつくような傾向は見いだせないとされてきた。実際に日本では信仰を自覚する、或いは持つ人は多くないというのが一般的な通説であり、1995年の地下鉄サリン事件や2001年のアメリカ同時多発テロ事件が宗教性と関連させて報道されることが多かったことから、日本人が抱く一般的な宗教へのイメージも良いものとは言いづらい。一方で日本人は決して「無宗教」なのではなく、仏教、神道、キリスト教などが混ざり合っただけで世俗化した「無意識な信仰心」を持っているという言説も流布されている。正月は神社に行き、お寺で葬儀をし、結婚式は教会で挙げるといった、異なる宗教が混沌と生活に根付いているという日本的な宗教の在り方は国際的な視点からでもかなり異例なものであるだろう。こうした日本の世俗的な宗教意識は、欧米諸国における宗教意識と違って人々の価値・信念・態度と本当に結びつかないのだろうか。

ここで、政治文化論における宗教と政治をめぐる論争について触れておきたい。まず「政治文化」という言葉には様々な定義が存在しているが、本稿では政治に対する人々の主観的な態度に焦点を当て、政治的対象に対する心理的指向という定義で論を進めていくことにする。粕谷(2014, 133-134)によれば、宗教は権威に対する態度に大きな影響を与えるとみなせることから政治文化の一種として分析されることが多いという。こうした背景から、宗教が実際に政治、とりわけ民主主義に対してどのような影響があるかという研究は諸外国ではいくつも存在している一方で、日本ではそうした論争は殆ど見られない。これは先述したように、日本では宗教意識が人々の価値・信念・態度と結びつくような傾向は見いだせず、宗教意識と政治的態度の繋がりについて軽視されてきたためだと考えられる。

本稿では日本における宗教と政治の関係性を政治文化論というアプローチから検証し、日本人の宗教意識が人々の価値・信念・態度に与える影響を政治的な側面から分析することを目的とする。これは諸外国と比べて宗教があまり根付いていない日本でこうした実証的な分析を行うことにより、宗教が与える政治への影響の一般性を強固にすると同時に日本人の世俗的な宗教意識が政治に与える影響の有無を検証することによって日本人の普遍的な価値観、意識に関する有用な知見を期待できるためである。

また、政治文化論という側面からこうした実証的な分析を行っていく上で、人々の政治的態度を政治的信頼、具体的には国会をどのくらい信頼しているかという面から測定することにする。代表制民主主義を採用している日本においては政治への信頼が有権者の政治行動の前提となっていることや、政治への信頼が民主主義という政治システムを機能させる資源の一つであると主張されてきたこと、そして日本におけるイデオロギーの拘束力が弱体化していることから、本稿では日本人の政治的態度を政治的アクターへの信頼となる「国会への信頼」で測りたいと考えている(善教, 2010; 西澤, 2008; 蒲島・竹中, 2012.)。こうした分析は前例の殆ど無いものであるため、こうした政治文化論的アプローチから宗教と政治の相関をより高度に研究していく上での叩き台にして欲しいというのが本研究の動機である。

本稿の意義は前述の通りであるが、日本では政治、宗教のどちらにおいても諸外国でなされてきた先行研究とは社会的なあり方や文脈が異なってくるため、先行研究のモデル、理論を当てはめて議論することは困難である。宗教と政治を結びつける理論付けや仮説を論じ、実証的分析におけるデータセットへの当てはめ方を議論してから分析を行っていくのが計量政治学では主な流れであるが、本稿では探索的データ分析と呼ばれるアプローチで分析を行うことにする。詳細は後の項に譲るが、データをまずは可視化して分析を行い、それらの結果から仮説を組み立てるといった分析アプローチを採用することによって本稿では日本における政治的態度と宗教意識を結ぶ知見を見出だすことが出来た。

まずは次節から日本における宗教と政治についての考察・位置づけを行った後に分析を行い、分析の結果から理論を組み立てることとする。分析パートでは 2008 年に実施された ISSP(International Social Survey Programme)による宗教についての国際比較調査の日本でのデータを用いた実証分析を行い、最終的に得られた結論、課題をまとめていく。今後の構成としては第 2 節にて宗教と政治についてそれぞれに分けた先行研究の紹介・整理を行い、第 3 節から実証分析、検証から何らかのパターンを探り、理論付けを行う。最後に第 4 節で結論と考察を述べ、今後の課題を提示する。

2. 先行研究

2-1. 概観

本節では日本人の宗教と政治のそれぞれに絞った先行研究をまとめていくが、その前におおまかなアウトラインを提示する。

Layman(1997.)の研究によると、アメリカにおいては党派と投票選択における信仰心の影響が強いという結果が現れることが明らかとなった。教義保守派、即ち強い信仰を持つような人は共和党(保守派)に投票し、宗教的自由主義者や世俗主義者といった、前者のような人々に比べてあまり強くない信仰を持つ人は民主党(革新派)に投票する傾向にあるというものである。これを一般的な保革対立軸に当てはめると信仰心の強い人は保守派に、弱い人は革新派になりやすい傾向にあると置き換えることが出来る。

日本における政治のコンテキストでは、上述した方法をそのまま当てはめて実証分析をすることには幾分慎重にならざるを得ないだろう。日本における政党制がそもそもアメリカとは異なるために共和党・民主党等のような二党対立による保守・革新軸のような政党間での明確な対立軸が存在せず、そもそも日本における今日のイデオロギー対立による拘束力が弱体化している(蒲島・竹中 2012.)ことから、本稿では保守・革新の対立軸での投票行動、及び政治行動という尺度から実証分析を行うことは不適切であると判断した。

また、信仰心という概念も考察したい。一意な“信仰心”、“宗教組織への参加”等で宗教意識を測ることも勿論重要であるが、それだけでは日本人の宗教意識を考察するのは性急である。お墓参りや初詣などの慣習化された宗教行動を多くの人が行っていることや靈魂観念・占いなどから見られる民俗的信仰等、多面的な宗教意識へのアプローチもまた重要と成り得るだろう(西脇 2004)。こうした世俗化した宗教意識を測定することは非常に困難であり、本研究における大きな特徴及び課題の一つである。

日本人の政治観、宗教観を紐解く前にまずは世界での政治と宗教を関連させた先行研究を挙げ、理論立ての枠組みを形作る場所から始める。

2-2. 政治と宗教の実証的研究

諸外国での政治と宗教についての実証分析の例を上げよう。まずは Layman(1997.)の政治行動、政治的態度といったものが個人の信仰心、或いは信仰の在り方によって変化があるというアメリカでの研究である。本稿ではこの知見から着想を得られ、かつ理論的基礎にもなっている。当然本稿だけでなく、政治と宗教における実証分析の多くに多大な影響を与えたというのは言うまでもない。

2001年9月11日に発生したアメリカ同時多発テロ事件以降、米国ではイスラーム、或いはイスラム教徒に対する興味関心が高まっている。Patterson, Gasim and Choi (2011)は9.11同時多発テロ事件前後におけるムスリムアメリカンの政治的動向を2000年と2004年の大統領選挙データから見た研究である。9.11同時多発テロ事件の報復の一環として行われたイラク戦争はムスリムアメリカンの反発を大いに買ったが、そのことが政治行動に反映されたかどうかを実証的に研究したものだ。また、カトリック国とムスリム国の両国における宗教と政治態度の信頼の相関を世界価値観調査のデータを用いて実証的に比較分析した研究も存在している(Gu and Bomhoff 2012.)。アメリカ南部、とりわけディープサウス(ジョージア州、フロリダ州、アラバマ州、ミシシッピ州、ルイジアナ州)におけるキリスト教に所属する白人の保守性について研究されている White(2014.)では、ディープサウスに根付いている後進的で保守的なキリスト教原理主義がその地域の政治思想にも大きな影響を与えていることを論じている。これは洗礼を受けたキリスト教信者が多く南部に存在することによって、その地域全体に政治思想への影響が見られているというものである。

当然こうした研究はアメリカだけに留まらない。Canetti-Nisim(2004.)はイスラエルにおける宗教と民主主義の価値(Democracy Values)についての研究で、宗教と民主主義の価値

の負の効果を媒介するものは権威主義であると論じた。強い権威主義者の中で強い宗教への信念を持つ人が往々にして民主主義の基本原則に対して否定的な態度を取るとというのが考察で記されている。Bagno-Moldavski(2015.)はイスラエルでの実証的な研究で、宗教に寛容な社会では民主化には繋がらず、むしろ民主化を妨げていく傾向にあるとしている。ここでも宗教へのコミットメントと政治態度を媒介するものは民主主義というよりはむしろ権威主義的なものであると論じられ、宗教に寛容な社会の中では宗教的保守主義、或いは教義保守派といった人々は政治的保守態度を頑なに維持し続けると述べられている。日本における記述的な研究でも国家(政治)と宗教を媒介するのは政治文化であり、とりわけ近代仏教ではそれがナショナリズムや社会主義であると論じられたことがある(大谷, 2006.)。

また、韓国における宗教と政治態度を実証的に分析した Kim(2006.)は宗教が政治的寛容を測る指標の一つであり、民主主義に大きな力を与えると論じている。政治的イデオロギーにも各宗教が異なる影響力を行使していることを明らかにしたこの論文もまた本研究に多大な影響を与えている。

こうした研究で共通している知見は、宗教が必ずしも民主主義に対して良い働きかけをするものではなく、むしろ負の効果を生み出すこともありえるということだ。宗教が政治的態度、行動に何らかの影響を与えてはいるものの、宗教の種類、とりわけイスラームやユダヤ教などではむしろ権威主義的な態度に力を与えているという。仏教や神道といったあらゆる宗教を取り込んだ日本的な宗教がもたらす宗教意識が果たして民主主義に対して影響を与え得るのか、仮にそうだとすれば民主主義を支持する働きをするかどうかについては殆ど研究がなされていないため、そういった意味では世俗的な宗教意識が与え得る政治的な影響というのが本稿の最大のテーマと言えよう。

本研究とは直接関係はしないものの、スウェーデンにおける宗教の役割が日本と類似しているという知見も興味深い。スウェーデン教会への参加、或いは宗教儀式への参加といったものは、スウェーデンにおいては「信仰の証」というよりはむしろ「世俗的な慣習」としての役割が強く、「信仰表出」という度合いが他の国と比べて相対的に低いとされている(真鍋 2011.)。日本、ドイツ、スウェーデンの三ヶ国を因子分析で比較してみても、日本とスウェーデンの宗教実践、宗教意識に関するパターンは類似しているという結果も出ている(真鍋 2012.)。

宗教行為自体に熱心でない国での分析として挙げられるのが Charles(2010.)である。ポストソヴィエトの独立国である南コーカサスの三ヶ国(アルメニア、アゼルバイジャン、グルジア)では、国民は宗教には熱心でないものの宗教団体、組織には高い信頼を寄せているという報告があるが、これは宗教団体がそもそも国に対して宗教や慣行を越えて積極的な役割を担い、南コーカサスの国民は宗教団体そのものへの信頼というよりはむしろ世俗的な機関、社会経済的な要因への信頼を寄せているというものである。こうした宗教団体、組織としての国の中での役割が経済、政治移行の失敗の原因であるのではないかと締められるこの論文でも、やはり宗教と民主主義の間における負の効果を示唆している。

以上の議論からわかるように、やはり日本における宗教と政治の実証的研究は見当たらない。諸外国では人々の宗教性を信仰心の度合いや信仰している宗教によって測定していることが多く、測度・指数・尺度というものがある程度確立されているが、日本という諸外国とは異なる宗教のコンテキストで宗教意識を測定することに対して慎重になる必要がある。また、政治的態度や政治行動を人々のイデオロギーから測定されることも多々あるが、第一節でも述べたように日本ではイデオロギーの拘束力は弱体化していると繰り返し検証されている。本稿では政治文化論というアプローチから分析を行いたいということもあり、宗教と政治に関する諸外国での先行研究とは異なったモデル、理論を提示する必要がある。これは日本における宗教と政治に関する実証的な先行研究がほぼ皆無に近いことなどもあり、非常に困難なことである。そのため、本稿では主に計量政治学にて用いられる確証的データ分析、まずモデルと仮説を立ててからそれらの検定を行うという分析手法とは異なる、探索的データ分析というアプローチで分析を行う方が適切であると判断した。データから帰納されたモデルの提示により、日本における宗教意識と政治的信頼の関係性について手がかりを幾つか見出すことが出来た。

こうした研究の背景を踏まえ、次項では本研究での日本における政治的態度、宗教意識のそれぞれの概念レベルについて位置づけをしていく。

2-3. 日本における政治的態度の測定

日本における政治的信頼について整理する前に、まずは政治的態度を測定する際に使われることの多いイデオロギーについて論じる。蒲島・竹中(2012.)の整理によると、イデオロギーとは以下の三つによって定義される。

- ① ある価値に基づいて一貫している複雑な思想・意識の体系を誰にでも理解できるように単純な言葉・イメージシンボル等によって表現したもの。
- ② 政党や階級などの社会集団によっての自己正当化の手段であり、国民の支持を獲得するためにどのような社会が望ましいのか、或いはそれに到達するにはどうしたらよいかを示したもの。
- ③ 比較的首尾一貫した信念や態度のまとまりであり、人間の心の奥で社会や政治の状況に対する認知・評価、政治意識、政治的態度、政治行動等を規定する要因の一つ。

このように定義されているイデオロギーのことを理解していて、尚且つ自分がどういうイデオロギーを持っているかを自覚している日本人は恐らく多くはないだろう。しかしある種の心理的傾向・政治的態度傾向を同じくするグループが生じたり、その心理的傾向が変化してきたりしたことも明らかで、それも「価値観」、或いは広義での「イデオロギー」と呼ぶ(富崎 2007.)。

しかし繰り返すようだが、本稿では日本人の政治的態度をイデオロギーで測定する方法を採用していない。これは、保革イデオロギーという対立軸の拘束力は弱体化しており、イデオロギーの安定性や保革イデオロギーの投票行動による対する規定力はなお保た

れているものこうした役割が日本という政治文化において弱体化しているというのも事実であるからである。確かに日本全体が右傾化しているという言説が度々流布されているものの、谷口(2015.)や竹中・遠藤・ジョウ(2015.)においても日本人、とりわけ有権者が保守化(右傾化)しているわけではなく、むしろ日本全体に脱イデオロギーの傾向があるという知見を実証的分析から見出している。

ここで日本人の政治的態度を測るものとして、政治的信頼という概念について考えたい。そもそも代議制のもとでは有権者の政治的行動の前提にあるものとは政治的アクターや政治制度であり、こうした政治への信頼政治システムを円滑に機能させる力があると度々主張されてきた(善教, 2010; 西澤, 2008.)。政治文化という視点から見れば代表制デモクラシーという日本での政治システムをどのくらい信頼しているかという尺度で人々の政治的態度を測ることは政治的対象に対する心理的指向、即ち日本人にとっての政治文化の一部分を測定出来るということになる。

政治意識研究や政治参加研究における中心的な概念の一つである政治的信頼を測定、分析することの意義は上記の通りであるが、当然ながらこれは簡単なことではなく、何を政治的信頼として捉えるか、どういった質問文から操作化するかによって政治的信頼の度合いは左右されることとなる。政治的信頼の効用における先行研究でも見解が分かれており、捉え方次第、分析手法次第で効用が確認されたりされなかったりしている。

こうした背景を踏まえながら、本稿では政治的信頼という概念を「国会をどのくらい信頼しているか」という質問項目から測定したい。我が国の政治システムである代表制デモクラシーの象徴とも言える国会を信頼しているということは即ち、現在の政治システムを信頼していると言い換えられると考えられるからである。今回の実証分析において用いるデータセットである 2008 年の ISSP 国際比較調査(宗教)において「国会への信頼」を問うた質問項目があることから、政治的信頼という概念を測定する上で最も適切であると判断した。こうしたことを踏まえながら日本人の政治的信頼を測定し、実証的分析によって本論文における結論、考察を導出したいと考えている。

2-4. 日本人の宗教意識

繰り返すが、日本における宗教の実証分析研究は多いとは言い難く、ましてや政治と関連させた研究は殆ど無いに等しい。これは日本が欧米諸国と比べて宗教的背景が大きく異なるため、日本における「宗教意識」という概念が軽視されてきたこと、欧米と日本で「宗教性」というものの在り方が大きく異なるために測定が困難であること、そして日本においては政教分離原則が憲法によって定められている(ex: 愛媛県靖国神社玉串訴訟)のために目に見える形での政治と宗教の関わりは皆無であると思われてきたこと等が挙げられる。そして何より、日本人が宗教活動、宗教参加をあまり起こさないことが最大の要因の一つと考えられる。

これは後述するが、宗教行動の習俗化により日本文化と融合し、特に仏教・神道の宗教

行動の自覚があまり起こらなくなった結果、目に見える形での宗教行動は盛んではなくなくなってしまったからである。また、日本における宗教のイメージはあまりよいものでなく、カルト教団や宗教国家の対立、及び宗教が盛んな国によるテロリズムによって一般的な宗教に対する日本での世間一般的なイメージもあまり良いものではない。サーベイ調査から見ても信仰を持つ日本人の割合は減少傾向にあり、国際的に見ても宗教を持つ日本人の割合が非常に少ないことから、日本は「無宗教国家」と度々言われている(稲場, 2011; 木村, 2002.)。これは先程も述べたように古くからある日本人の宗教である仏教、神道のような多神教的な文化環境が一つの要因であり、更には江戸時代からこうした宗教が形骸化されてしまったために一般的には強い信仰を自覚する機会に乏しいという背景がある。そのため世論調査にはこうした日本人の宗教意識は反映しづらく、日本と諸外国とで宗教意識が大きく異なっていると解釈される。

しかし 2-1 でも述べたように、日本人の宗教意識というものは宗教組織への参加や積極的な宗教行動では測れない部分も存在している。神道や仏教といった宗教による文化が世俗化し、無自覚のうちに宗教性を発露している可能性が宗教意識に関する先行研究によって示唆されている。また、2008年のISSP国際比較調査(宗教)では無宗教者であっても仏教は50%、神道は18%の人が親しみを持っていたことから、宗教実践、宗教行動を特にしていなくてもある程度の人々は宗教に対しては程々に寛容であると考えられる。

日本人は宗教意識というものをあまり持っていないというのが一般的な通説だが、一方で墓参り、神社参拝等といった宗教的行動、或いは宗教実践と呼ばれるものをよく行っている。そうした慣習化された行動が人々の心に根付いている日本独自の宗教意識と繋がっているという知見を見出した真鍋(2008.)や、欧米での知見を日本でテストし、宗教と社会行動、とりわけボランティア活動の関係性における研究では欧米諸国と同様に宗教と社会行動においては正の相関が見られたという結果を見出した寺沢(2013.)といった研究があるが、彼らが同様に示唆しているのが信仰として自覚されない宗教意識の可能性であり、そうした意識は「無自覚の宗教性」と呼ばれることが時折ある。また、金児(2004.)も「熱心に宗教を信仰しているかどうか」だけでは日本人の宗教意識は測れないもので、日本人の宗教意識が調査項目では表れ辛い非明示的なものであると指摘した。これは1998年のISSP個票データにおいて宗教を持っていない人の中で信仰心を持っていると回答した人が12.3%いたことから垣間見え、宗教意識の測定の困難さを告白している。

よって本研究では「信仰心を持っているか」という質問の他に幾つかの宗教実践、宗教意識に関する質問項目も独立変数として用いることで人々の宗教意識に関する何らかのパターンを見つけ、どういった心理が政治的態度に影響するのかも考慮することとする。

3. 分析

3-1. 整理

これまでの議論から分析に入っていくことになるが、ここで探索的データ分析について

説明を加える。計量政治学では分析の前に理論、仮説を立ててから分析を行うのが一般的であるが、日本における政治と宗教を関連させた研究については前例が殆ど無いこと、宗教における文脈が特異なことから適切な仮説を立てることが困難であることは再三論じてきた。本稿で採用されている探索的データ分析は自己完結的に導かれるモデルを検証するのではなくむしろ適切な理論、仮説を得るための分析であり、データを様々な切り口で検証し、探索していくアプローチである。よって本節ではまず回帰分析や主成分分析を踏まえながらおおまかにデータを眺め、そこから理論、仮説を検討していくという構成になる。

宗教意識と政治的信頼という二つの概念を実証的に分析していく上で、まずはデータセットと測定に使用した質問項目について述べる。データセットについては国際比較調査グループ、ISSP(International Social Survey Programme)の2008年に実施されたISSP国際比較調査(宗教)の中から日本のデータのみを加工、利用して分析を行った。住民基本台帳から層化無作為2段抽出された全国16歳以上の国民1,800人のうち回答のあった1,200人(66.7%)を分析対象とする。これは宗教への質問項目が多様であること、データセットがオープンであることから今回はISSP国際比較調査(宗教)の最新のデータである2008年度のものを使用するのが適当であると判断したからである。

使用する質問項目についてだが、まずはおおまかな仮説を立てるところから始め、それから変数の吟味を行う。ここでは前節の議論から二つの仮説を立てた。

- ・ 信仰心のある人ほど、政治的信頼が高くなる傾向にある。
- ・ 宗教実践を頻繁に行っていたり宗教について肯定的であったりすると、政治的信頼が高くなる傾向にある。

前者については金児(2004)で述べられていたように、1998年のISSP国際比較調査(宗教)では宗教を持っていない人の中で信仰心を持っていると答えた人が12.3%いた。これは特定の宗教への所属だけでなく、単なる自然崇拝や先祖崇拝によって信仰心を自覚するレベルまで育んだ人が一定数いると考えられる。よってこちらは自覚する信仰心について考慮したい。後者については宗教実践、宗教意識に関する質問項目を幾つか選び、宗教実践、宗教に対して抱く心理などから重回帰分析及び主成分分析によって国会への信頼との相関を測り、政治的信頼に対して影響をもたらす何らかのパターンを見出すことを目的として作成した。

実際に用いた変数については「国会をどのくらい信頼しているか」という5段階尺度の質問項目と信仰心についての7段階尺度の質問項目、宗教実践や宗教意識等を測る11個の質問項目、母親が宗教を持っているか持っていないかの二つに分けたダミー変数、そして年齢、地域、学歴、収入、性別、企業や国家機関、宗教機関への信頼といったものである。機関への信頼や宗教実践、宗教意識を測る項目などといったものがどういう質問がなされて、どういった測定になっているかは付録に掲載されてある。

3-2. 分析

まずは重回帰分析を用いておおまかなデータの分析を行い、前項で立てた仮説を検証する。従属変数を「国会への信頼」に置き、独立変数に信仰心、宗教実践や宗教意識等を測る11個の質問項目を用い、年齢、地域、学歴、収入、性別、企業や国家機関、宗教機関への信頼を統制変数とした。その結果が表1である。

従属変数：国会への信頼	標準化されていない係数	標準化係数	t 値	有意確率	
	B	標準誤差			ベータ
(定数)	0.102	0.247	0.413	0.68	
年齢	0.007	0.002	0.146	3.072	0.002
性別	-0.031	0.068	-0.019	-0.456	0.648
信仰心	0.066	0.032	0.14	2.056	0.04
母親の宗教の有無	-0.113	0.075	-0.067	-1.496	0.135
地域	-0.006	0.033	-0.007	-0.17	0.865
学歴	0.018	0.034	0.023	0.521	0.602
収入	-0.001	0.011	-0.004	-0.09	0.929
企業への信頼度	0.254	0.055	0.214	4.656	0
宗教団体への信頼度	0.046	0.046	0.049	1.001	0.317
裁判所への信頼度	0.104	0.048	0.105	2.177	0.03
学校への信頼度	0.238	0.051	0.224	4.713	0
神の存在を信じるか	-0.047	0.029	-0.074	-1.603	0.11
お祈りの頻度	0.005	0.014	0.021	0.401	0.689
寺、神社、教会に行くか	0.037	0.03	0.066	1.247	0.213
宗教的な目的以外で宗教施設に行くか	-0.042	0.038	-0.059	-1.109	0.268
宗教、霊的なものを信じているか	-0.058	0.051	-0.07	-1.123	0.262
宗教に心の安らぎ、幸福を感じるか	0.009	0.047	0.015	0.198	0.843
宗教は友人を作るか	-0.022	0.034	-0.036	-0.639	0.523
宗教は困難や悲しみを癒すか	0.053	0.048	0.081	1.099	0.272
宗教を通して良識を持った人と知り合うか	0.017	0.039	0.026	0.441	0.659
母との幼少期の参拝、礼拝	-0.031	0.032	-0.06	-0.978	0.328
幼少期の参拝、礼拝	-0.022	0.033	-0.04	-0.648	0.517

表1: 重回帰分析

表1を見てみると、年齢、企業や裁判所、学校への信頼、そして信仰心が有意確率5%を満たした。信仰心と国会への信頼には関係性が見られた一方で、宗教実践、宗教意識を測る11の質問項目のいずれにも国会への信頼と相関が見られなかった。

しかし宗教実践、宗教意識は本当に国会への信頼に何も影響を及ぼさないのだろうか。更なるデータ探索をするため、次に宗教実践、宗教意識に関する質問項目に宗教団体への信頼を加えた11項目で主成分分析を行い、抽出された主成分で再び重回帰分析を行った。

主成分分析の結果が表2である。

成分行列			
主成分分析	主成分		
	1	2	3
幼少期の母との参拝、礼拝	0.527	0.511	0.573
幼少期の参拝、礼拝	0.535	0.518	0.562
お祈りの頻度	0.592	0.289	-0.363
寺、神社、教会に行くか	0.625	0.322	-0.199
宗教的な目的以外で宗教施設に行くか	0.655	0.289	-0.245
神の存在	0.483	0.139	-0.31
宗教、霊的なものを信じているか	0.727	0.18	-0.309
宗教に心の安らぎ、幸福を感じるか	0.721	-0.459	0.072
宗教は友人を作るか	0.513	-0.627	0.205
宗教は困難や悲しみを癒すか	0.687	-0.521	0.124
宗教を通して良識を持った人と知り合うか	0.658	-0.449	0.044
主成分の名称	総合評価	習慣化された宗教行動	幼少期の宗教実践

表2：宗教意識、宗教実践に関する諸項目の主成分分析

第一主成分は全て正の重みがつけられているため、「総合評価」とみなすことができる。第二主成分においては宗教実践について高い値が見られる一方で、宗教に抱く心理についての質問項目には負の重みがついている。よって名称としては「習慣化された宗教行動」とし、「宗教意識」と対になるものとする。第三主成分については言わずもがな、「過去の宗教実践」である。この主成分分析の結果より抽出された三つの主成分を宗教実践、宗教意識に関する質問の代わりに潜在変数として使って再び重回帰分析を行った。その結果は表3に記されている。

分析結果を見ると、信仰心の当てはまりが悪くなった代わりに第二主成分である「習慣化された宗教行動」が国会への信頼と負の相関を見せている。ここで、第二主成分では宗教に対する心理に負の重みが付いていることを考えてみると、この回帰分析の結果を「宗教の役割、宗教的な心理に良い効果を感じる人は国会への信頼が高くなる傾向にある」と読み替えることができないだろうか。参拝、礼拝やお祈りの頻度などといった行動面から表れる宗教意識ではなく、宗教に心の安らぎを求めたり人との繋がりを求めたりするという精神面から表れる宗教意識の方が国会への信頼に正の影響を与えている可能性が見られたというのがこの回帰分析から得られた知見である。前項の仮説の一つ、「宗教実践を頻繁に行っていたり宗教について肯定的であったりすると、政治的信頼が高くなる傾向にある」

を全面的に肯定できるような内容ではないにせよ、宗教意識と政治的信頼におけるメカニズムについて幾らか信頼の持てる結果であると考えられる。

従属変数：国会への信頼	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
(定数)	-0.05	0.253		-0.198	0.843
年齢	0.007	0.002	0.158	3.464	0.001
性別	-0.027	0.066	-0.017	-0.409	0.683
信仰心	0.051	0.03	0.11	1.724	0.085
母親の宗教の有無	-0.131	0.073	-0.078	-1.779	0.076
地域	-0.002	0.033	-0.002	-0.059	0.953
学歴	0.014	0.034	0.018	0.405	0.686
収入	0.001	0.011	0.003	0.073	0.942
企業への信頼度	0.249	0.054	0.209	4.614	0
宗教団体への信頼度	0.047	0.046	0.049	1.033	0.302
裁判所への信頼度	0.099	0.047	0.1	2.113	0.035
学校への信頼度	0.234	0.05	0.22	4.661	0
総合評価	-0.026	0.052	-0.031	-0.496	0.62
宗教実践	-0.083	0.035	-0.101	-2.389	0.017
宗教の機能性	-0.015	0.034	-0.019	-0.441	0.66

表3:抽出された主成分を用いた重回帰分析

3-3. 理論付け

前項の分析によって、信仰心、宗教意識と国会への信頼の関係について悪くない結果が得られた。では宗教と政治を結びつける要因としてどんなことが考えられるだろうか。確かに信仰心や宗教に対する肯定的な心理が国会への信頼と関連性があるようであることはわかったものの、そうした関係性に説得力を持たせるようなモデルが無ければ意味が無い。ここで表1、表3の重回帰分析を見てみると、年齢が国会への信頼に正の効果を示していることがわかる。よって年齢という視点から宗教と政治を結ぶモデルを作成する。

宗教と政治を結ぶ要因として、日本の政治における重要な問題であるシルバー民主主義(シルバーデモクラシー)というものがある(小林, 2010.)。日本では2007年に超高齢社会となっていて¹、こうした高齢化の影響として有権者の多くが高齢者に占められていることから、政治家は有権者のメイン層である高齢者を優遇しなければ選挙に不利になってしまう。こうして政治家は高齢者を優遇し、若者よりも高齢者の意見がより政治に反映されるといった悪循環が生まれてしまうのがシルバー民主主義という問題である。これが

¹“人口推計年齢別人口 表5 年齢3区分別人口の推移(昭和25年-平成21年)”。総務省。

<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2009np/pdf/gaiyou.pdf#page=4> より 2015年12月20日閲覧。

日本における政治的態度と宗教意識を繋ぐキーワードであると本稿では結論付けた。

年齢層の高い人達はそうでない人に比べて信仰心というものを持ちやすい傾向にあることから(木村, 2002.)、年齢層の高い人ほど信仰心をより多く持ち、かつ高齢者を優遇する現在の国会、政治に好意、或いは信頼を持つということが考えられる。2008年のISSP国際比較調査(宗教)にて日本人が持つ宗教の大多数が仏教であるということがわかっているが、この仏教の中には当然創価学会員も含まれていると思われる。そうした人々は公明党を支持する傾向が強く、自分の支持政党と連立している自民党が与党である国会に対しては信頼を寄せる可能性がある。創価学会でなくとも、仏教や神道などの団体の一部が自民党を支援していることから、仏教や神道などに篤い信仰を持つ人は自分の支援している政党が機能している国会を信頼する傾向にあるとも考えられる。

高齢者が篤い信仰を持つ傾向にある理由は幾つか考えられるが、まず思い付くのが年を経るにつれて顕在化してくる死への恐怖、不安等から神に縋るようになるというものである。若い頃から信仰を強く持っていたケースもあれば、元々信仰に疎かった人が人の勧め等から信心を得るというケースもあるだろう。こうした人々は神や超自然的な存在が今の自分を癒やしてくれるという効果や宗教を通じた他人との繋がりを期待することの方が慣習的な宗教実践よりも宗教意識に強く表れると考えられる。それ故に表3の重回帰分析にて宗教や宗教の役割について肯定的な心理と国会への信頼に相関が見られたのだと推測される。

次に考えられる理由の一つとして、高齢者の生まれ育った家庭によって信仰心が育まれたというもので、大きな根拠として戦前の日本では国家主導によって国家神道が広く推し進められていたことが挙げられる。神道では父は子にとって尽くさなければならない絶対的な存在であり、この関係を国と国民に拡張し、国民は天皇を絶対者として崇めるようにされていたことがあった。各家庭に広められた国家神道的な考え方が戦後辺りの家庭には残っており、現在の高齢者がそうした価値観を受け継いでいる可能性は十分に考えられる。戦後デモクラシーによる政教分離原則が広まっていくにつれ、戦前の国家神道的な考え方を持つ人々と戦後デモクラシーが普及した世代の人々とで徐々に価値観が相反していき、それが信仰心や宗教実践、宗教意識に表れたのではないだろうか(子安 2004,9-27)。また、仏教についても明治維新や廃仏毀釈、神仏分離を経て影響力が低下していった経験を経てもなお、仏教は「家の宗教」として人々の生活にとっても近い関係を持ち続けていた(島菌 2011)。こうしたことから、高齢者の生まれ育った家庭と若者の生まれ育った家庭では宗教意識が異なってくると考えられる。

最後に創価学会の存在が考えられる。現在でも日本における宗教勢力として広く知られている創価学会が急速に学会員を拡大させていったのは戦後間もない1950年代頃であり、その頃に信仰を得た人々は現在では当然高齢者として数えられる。ここからも、高齢者が信仰心を持つ傾向にあるというのが伺える。また、仏教や神道の団体の一部、創価学会などについては先述した通り特定の政党を支援していることから、こうした宗教所属者が現

在の国会を支援する可能性というのも当然ある。

こうした背景から、本稿では新たに仮説を立てた。

- ・年齢層の高い人は信仰心が強くなる傾向にある。
- ・年齢層の高い人は宗教実践を頻繁に行っていたり宗教について肯定的であったりする傾向にある。

ここからは仮説検証に入る。まずはクロス表を用いて年齢と信仰心、そして国会への信頼の関係性を調べる。ここで、クロス表を使う関係上、変数をダミーに加工する必要がある。まず60歳未満、以上の二つに分けた年齢ダミーを作成した。次に信仰心の変数について、信仰心がとてもある・かなりある・まあある人を“強い信仰心に”、どちらともいえない・あまりない人を“まあまあの信仰心”に、ほとんどない・全くない人を“弱い信仰心”という三点尺度に置き換えた。国会への信頼度も同様に、国会を非常に信頼している・かなり信頼している、まあ信頼している人を“高い信頼”、あまり信頼していない・全く信頼していない人を“低い信頼”という二点尺度に置き換えた。これらのダミー変数についてはクロス表を見る上でのわかりやすさという点もあるが、それぞれの期待度数、特に強い信仰心、高い国会への信頼度についてそれ以外の比率が著しく低かったため、これらの変数をまとめて分析することにした。それが表4である。

60歳未満の人々について信仰心と国会への信頼との相関は見られなかった一方で、60歳以上の人々については信仰心が強ければ強くなるほど国会への信頼が高くなるという結果となった。この分析はシルバー民主主義の効果が実際のデータに表れていることを示唆しており、よって年齢層の高い人は信仰心を強く、かつ政治的信頼が高くなる傾向にあるという仮説については妥当だと言えるだろう。

次に宗教実践、宗教意識に関する11の質問項目を用いて、年齢層の高い人ほど宗教実践を頻繁に行ったり宗教に対して肯定的になったりするかを検証する。ここで、宗教実践、宗教意識に関する質問を全て0と1のダミー変数にして得点化する。具体的には宗教実践の頻度については年に1,2回を上回る頻度で礼拝や参拝、お祈りなどをする、した経験があった場合には1という得点を与え、それよりも頻度が低いと0という得点を与える。宗教意識に関してはどちらかと言えば肯定的な回答を1、否定的な回答を0とした。こうした得点を全て足しあわせ、0~11点までの12点尺度の総合得点を算出した。この総合得点と先ほど作成した60歳未満、60歳以上で分けた年齢ダミーとでt検定を行い、平均値の差を検証することで年齢層の高い人が宗教実践を頻繁に行ったり宗教に肯定的な心理を持ったりする傾向にあるかどうかという仮説を検証した。その結果が表5である。

カイ 2 乗検定				
年齢ダミー		値	自由度	漸近有意確率 (両側)
59歳以下	Pearson のカイ 2 乗	3.017 ^b	2	0.221
	尤度比	3.04	2	0.219
	線型と線型による連関	1.542	1	0.214
	有効なケースの数	690		
60歳以上	Pearson のカイ 2 乗	6.239 ^c	2	0.044
	尤度比	6.549	2	0.038
	線型と線型による連関	5.138	1	0.023
	有効なケースの数	370		
合計	Pearson のカイ 2 乗	21.852 ^a	2	0
	尤度比	22.757	2	0
	線型と線型による連関	20.4	1	0
	有効なケースの数	1060		

年齢ダミー				信仰心ダミー			合計	
				高い	まあまあ	低い		
60歳未満	国会への信頼ダミー	高い	度数	140	177	239	556	
			総和の %	20.30%	25.70%	34.60%	80.60%	
		低い	度数	36	51	47	134	
			総和の %	5.20%	7.40%	6.80%	19.40%	
	合計			度数	176	228	286	690
				総和の %	25.50%	33.00%	41.40%	100.00%
60歳以上	国会への信頼ダミー	高い	度数	109	73	39	221	
			総和の %	29.50%	19.70%	10.50%	59.70%	
		低い	度数	86	50	13	149	
			総和の %	23.20%	13.50%	3.50%	40.30%	
	合計			度数	195	123	52	370
				総和の %	52.70%	33.20%	14.10%	100.00%
合計	国会への信頼ダミー	高い	度数	249	250	278	777	
			総和の %	23.50%	23.60%	26.20%	73.30%	
		低い	度数	122	101	60	283	
			総和の %	11.50%	9.50%	5.70%	26.70%	
	合計			度数	371	351	338	1060
				総和の %	35.00%	33.10%	31.90%	100.00%

表4：年齢ダミーを層別プロットした国会への信頼ダミーと信仰心ダミーとのクロス表

グループ統計量					
	年齢ダミー	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
総合得点	60歳未満	780	3.1333	2.48335	0.08892
	60歳以上	420	4.4667	2.8505	0.13909

独立サンプルの検定										
		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間	
									下限	上限
総合得点	等分散を仮定する。	18.823	0	-8.416	1198	0	-1.33333	0.15843	-1.64416	-1.02251
	等分散を仮定しない。			-8.077	762.922	0	-1.33333	0.16508	-1.65741	-1.00926

表5：総合得点ダミーと年齢ダミーによる平均値の差の分析

表5から、総合得点と年齢ダミーの平均値の差が見られたことがわかる。よって年齢層の高い人ほど宗教実践を頻繁に行ったり宗教に対して肯定的な心理を持ったりするという仮説が支持された。

4. 結論

4-1 結果のまとめと考察

本稿では政治文化論的なアプローチから、従来殆どされてこなかった日本における宗教意識と政治的信頼の関係性について検証してきた。これは前例の殆ど無い研究であることから、理論と仮説を見つけるための分析として探索的データ分析という手法を用いて分析を進めてきたが、その結果としてシルバー民主主義の効果が宗教意識と政治的信頼を結びつけているというモデルを発見することが出来た。このモデルの当てはまりはとても良く、日本における政治文化を論じていく上でこの知見は有用であると思われる。ではこれより、探索的な分析によって得られた結果をまとめ、改めてそれについて考察をする。

最初に立てた二つの仮説である「信仰心のある人ほど、政治的信頼が高くなる傾向にある」については支持される結果となったが、「宗教実践を頻繁に行っていたり宗教について肯定的であったりすると、政治的信頼が高くなる傾向にある」については少し議論が必要となる。宗教に対する肯定的な心理は国会への信頼に対して正の影響を、慣習化された宗教行動は国会への信頼に負の影響を与えるというこの結果と、その間を結ぶ要因については少々解釈が難しいものであり、この部分を更に深く突き進めることによって何かしらの知見が得られる可能性も考えられるが、本稿ではシルバー民主主義による影響の方に焦点を当てたほうが適切であると判断した。よってこの部分については今後の研究に期待したい。

以上の分析からシルバー民主主義の可能性について論じ、実際に検証してみた結果、年

年齢層の高い人は信仰を篤く持ち、国会を信頼することがわかった。また、年齢層の高い人は宗教に対してポジティブな効果を持つことも明らかとなったため、実際にシルバー民主主義の効果を可視化することが出来た。これは高齢者が幼少期の頃には未だ仏教、神道などの日本的な宗教が生活に根付いていたために信仰心が育まれたり、或いは年を経るにつれて顕在化してくる死への恐怖、不安等から信仰心を持ったりする傾向にあると考えられる。そうした高齢者を優遇する現在の国会、政治に信頼を寄せる傾向にあるというのはある意味自明なものであり、シルバーデモクラシーの影響が実際にデータから読み取れたことによって高齢者が政治的信頼を高めるという理論が裏付けられたというのが今回の分析の大きな収穫と言えるだろう。しかし一方で、60歳未満の人々における政治的信頼と宗教意識の関係性については説得力を失ってしまう結果にもなってしまった。このことについては次節で今後の研究における課題として取り上げる。

宗教意識と政治的態度の相関を説明する要因がこの結果だとすると、少々拍子抜けではあるものの、しかし大きな知見にもなる。先進国の多くで少子高齢化時代の趨勢が見られていることから、この結果は日本だけでなく他の先進国にも当てはまる可能性があるからだ。

4-2. 今後の課題

ここまでの仮説の検証から幾つもの知見が得られたが、しかし一方で課題を大きく積み残している。それらを取り上げ、本稿を締めたいと思う。

まず、本稿における政治的信頼の捉え方である。一口に政治的信頼といっても様々な捉え方があり、その測定方法、政治的信頼がもたらす効果についても議論が今なお行われている。本稿における実証的分析で用いたデータセットである2008年度のISSP国際比較調査(宗教)の制約上からそうした人々の政治的信頼という概念レベルを単純に「国会をどのくらい信頼しているか」という尺度から測定したが、続く研究ではこの部分をまず議論する必要があるだろう。国会への信頼という尺度は代表制デモクラシーへの信頼と読み替えるにせよ、或いは民主主義への信頼と読み替えるにせよ、概念レベルと測定レベルの距離が全く無いとは言い切れない。国会への信頼に代わる何か、或いは国会への信頼と代表制デモクラシーの間を埋める何らかの理論が今後必要となると考えられる。

次に宗教意識と政治的信頼の関係性におけるモデルについてである。これは日本における宗教や政治の文脈が欧米諸国とは異なってくるために同じ手法でのテストが困難であることから先行研究とは違う方法、即ち政治文化論的なアプローチで実証的分析を行わざるを得なかったという背景があるが、前例の殆ど無い研究分野である故に探索的な分析を行った結果、シルバー民主主義が日本人の宗教意識と政治的信頼の関係に影響しているという、普遍性について少々欠ける結果となってしまった。シルバー民主主義の効果とは異なる視点から見た更なるモデルを考察していく必要があると思われる。

それから、宗教意識の測定方法についても考慮していく必要がある。真鍋(2013.)による

と宗教性の測定に用いられてきた「測度・指数・尺度」はキリスト教の国々で開発されてきたものであり、日本人の宗教意識を測る上では必ずしも適切ではないことを示唆している。よって今後はより慎重な分析が必要となるだろう。ISSP 国際比較調査(宗教)では確かに日本の宗教の文脈にも幾らか考慮された質問が行われているものの、世界各国との国際比較を容易にするためにあまり深くまで突っ込んだ質問はされていない。日本での文脈に特化したデータセット等が今後作られれば、より日本的な世俗化した宗教意識を測定することが容易となるだろう。

最後に、本稿では神道や仏教、キリスト教等特定の宗教に所属していることによる宗教属性の違いの影響を考慮していないことである。これについては Layman(1997.)も明らかにしていたように宗教属性の違いによつての対立は米国では弱体化しているものの存在自体はしていることから何らかの影響を考えることもできるが、そもそも特定の信仰がある人の絶対数が少ないことや、世俗化した宗教意識に重きを置いた研究であるために今回は考慮していない。ただしここで Canetti-Nisim(2004.)や大谷(2006.)が指摘するように、国家、或いは政治と宗教を媒介するのは政治文化であるという知見もある。特に日本で多く見られる近代仏教においてはナショナリズム、社会主義との結びつきが顕著であると主張していることから、今後の研究ではこのことも含めた更なる考証を要されるだろう。

謝辞

本稿を執筆していくにあたり、指導教員である濱中新吾先生には沢山のご指導ご鞭撻を頂いた。政治学の基礎や統計分析における方法論などといった学問を修める上で必要なことだけにとどまらず、社会で生きていく上で大事な心持ちや知識などを授けてくださった。時には出された難題に逃げ出しそうなきもあつたが、それも現在の私を形作るような良い経験であつたと確信している。この場を借りて感謝の意を申し上げたい。

また、濱中研究室4年の大沼 宏平さんとはこの二年間、互いに切磋琢磨し合いながら研究を続けてきた。専門性の高い研究内容であつたために鋭い意見をあまり交わせなかつたのが心苦しかつたが、それでも共に励まし合いながら乗り越えてきた二年間は貴重なものであつた。同じく濱中研究室の3年の4名とも意見を繁く交わし、研究の良い刺激となつた。3年次にのみ行われた合同ゼミ合宿においても宇都宮大学松尾准教授及び松尾ゼミ生の方々にたくさんのご意見をいただき、本研究をより良いものにする体験を頂いた。非常に感謝している。

参考文献

- Daphna Canetti-Nisim.** (2004). "The Effect of Religiosity on Endorsement of Democratic Values: The Mediating Influence of Authoritarianism." *Political Behavior*, 26(4), 377–398.
- Dennis Patterson, Gamal Gasim, Jangsup Choi** (2011). "Identity, Attitudes, and the Voting Behavior of Mosque-Attending Muslim-Americans in the 2000 and 2004 Presidential Elections" *Politics and Religion*, 4, 289-311
- エドモンド・バーク(1790).『フランス革命の省察』PHP 文庫
- Geoffrey C. Layman** (1997). "Religion and Political Behavior in the United States: The Impact of Beliefs, Affiliations, and Commitments from 1980 to 1994." *Public Opinion Quarterly* 61, no. 2 (Spring 1997): 288-316.
- 稲場圭信 (2011). 「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」『宗教と社会貢献』 1(1) P.3-P.26
- 蒲島 郁夫・竹中 佳彦 (2012).『イデオロギー』(現代政治学叢書 8)東京大学出版
- 金児 恵 (2004).「日本人の宗教的態度とその精神的影響への影響:ISSP 調査の日米データの二次分析から」『死生学研究』 春号,348-367
- 加藤秀治郎・岩渕美克ほか編 (2007).『政治社会学』一藝社
- 平野浩(2002).「社会関係資本と政治参加——団体・グループ加入の効果を中心に」『選挙研究』 17号 19-30.
- 粕谷祐子(2014.)『比較政治学』ミネルヴァ書房
- Kim, Junghyoun** (2006). "Religion and Political Attitudes in South Korea." PhD diss., *University of Tennessee*.
- 木村雅文(2002).「現代日本人の宗教意識 —JGSS-2000 からのデータを中心として—」『JGSS 研究論文集[1]』 125-134
- 小林庸平(2010).「スウェーデンの実例から見る日本の若者政策・若者参画政策の現状と課題」『季刊政策・経営研究』 2010(3), 89-107, 2010-07
- 子安宣邦(2004).『国家と祭祀 — 国家神道の現在』青土社
- 真鍋 一史 (2008). 「日本的な「宗教意識」の構造 —— 「価値観と宗教意識」に関する全国調査の結果の分析 ——」 社会学部紀要第 104 号.
- 真鍋 一史 (2011).「ポストモダンの社会における宗教の変容：スウェーデンにおける事例研究」関西学院大学先端社会研究所紀要, 6: 65-76
- 真鍋 一史 (2012).「宗教性の諸相とその構造の国際比較 (II) *——ISSP 2008 のデータ分析——」社会学部紀要 第 115 号
- 真鍋 一史 (2013).「宗教性の『測度・指数・尺度』に関する実証的な検討——日本と欧米の国ぐにとの国際比較の視座から——」 社会学部紀要第 117 号
- Man-Li Gu and Eduard J. Bomhoff** (2012). "Religion and Support for Democracy: A

- Comparative Study for Catholic and Muslim Countries.” *Politics and Religion*, 5, pp 280-316.
- 松下光範・加藤恒昭(2006.)「コンテキスト保持による探索的データ分析支援の枠組み」『日本知能情報ファジィ学会誌』18(2), 251-264, 2006-04-15
- マイケル・オークショット (1988).「保守的であるということ」『政治における合理主義』所収 石山文彦訳 勁草書房
- 西久美子 (2009). 「"宗教的なもの"にひかれる日本人 :ISSP 国際比較調査(宗教)から」『放送研究と調査』 59(5), 66-81
- 西澤由隆(2008). 「政治的信頼の測定に関する一考察」『早稲田政治経済学雑誌』 370号 ,pp.53-64
- 西脇良 (2004).『日本人の宗教的自然観』ミネルヴァ書房
- 野田裕久編 (2010).『保守主義とは何か』ナカニシヤ出版
- Olena Bagno-Moldavski (2015). “The Effect of Religiosity on Political Attitudes in Israel.” *Politics and Religion*, 8, pp 514-543.
- 雄山真弓・岡田孝・李永幘・李貴峰(1997).「知識発見法による探索的データ解析」『計算機統計学』 9(1), 1-12, 1997-05-30.
- Robia Charles (2010). “Religiosity and Trust in Religious Institutions: Tales from the South Caucasus (Armenia, Azerbaijan, and Georgia).” *Politics and Religion*, 3, pp 228-261.
- 境家史郎 (2015). 「戦後日本における政党間イデオロギー配置と投票参加行動」『レヴアイアサン』 57号、47-71
- 柴田里程・中園美香(1995).「あるマーケティングモデル・データのモデル化」『日本統計学会誌』 Vol.25, No.3, pp245-260.
- 島藺進(2011).「国民国家日本の仏教」末木文美士・松尾剛次・佐藤弘夫・林淳・大久保良峻編『新アジア仏教史 14 近代国家と仏教』佼成出版社 所収
- Steven White (2014). “The Heterogeneity of Southern White Distinctiveness” *American Politics Research*, Vol. 42(4) 551-578
- 玉野和志(2008).『創価学会の研究』講談社現代新書
- 田中愛治(2002). 「政治的信頼と世代間ギャップ : 政治的システム・サポートの変化」『経済研究』 53(3), 213-225
- 谷口将紀 (2015).「日本における左右対立 (2003~14年)・政治家・有権者調査を基に-」『レヴアイアサン』 57号、9-24.
- 竹中佳彦・遠藤晶久・W・ジョウ (2015). 「有権者の脱イデオロギーと安倍政治」『レヴアイアサン』 57号、25-46.
- 寺沢 重法 (2013).「現代日本における宗教と社会活動—JGSS 累積データ 2000~2002 の分析から—」 日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集 13号

- 善教将大(2009). 「日本における政治的信頼の変動とその要因 1982-2008 : 定量・定性的アプローチによる「政治」と政治的信頼の因果関係の分析」『政策科学』 17(1), 61-76, 2009-1.
- 善教将大(2010). 「政治への信頼のパラドクス : 信頼の条件付け効果とシステム・フィードバック」『政策科学』 18(1), 57-73, 2010-10.

付録———使用した変数

使用したデータセット：ISSP 2008 - Religion III

・宗教実践、宗教意識に関する質問

V33 - Q16

Please indicate which statement below comes closest to expressing what you believe about God.

- 1 I don't believe in God
 - 2 I don't know whether there is a God and I don't believe there is any way to find out
 - 3 I don't believe in a personal God, but I do believe in a Higher Power of some kind
 - 4 I find myself believing in God some of the time, but not at others
 - 5 While I have doubts, I feel that I do believe in God
 - 6 I know God really exists and I have no doubts about it
-
- 8 Don't know
 - 9 No answer

V56 - Q24

When you were a child, how often did your mother attend religious services?

- 1 Never
 - 2 Less than once a year
 - 3 About once or twice a year
 - 4 Several times a year
 - 5 About once a month
 - 6 2-3 times a month
 - 7 Nearly every week
 - 8 Every week
 - 9 Several times a week
-
- 98 Can't say/ can't remember
 - 99 No answer

V58 - Q26

And what about when you were around 11 or 12, how often did you attend religious services then?

<It is strongly recommended that the item on respondent's church attendance in the

demographics use the same response categories as those below.>

- 1 Never
- 2 Less than once a year
- 3 About once or twice a year
- 4 Several times a year
- 5 About once a month
- 6 2-3 times a month
- 7 Nearly every week
- 8 Every week
- 9 Several times a week

98 Can't say/ can't remember

99 No answer

V59 - Q.27

About how often do you pray?

- 1 Never
- 2 Less than once a year
- 3 About once or twice a year
- 4 Several times a year
- 5 About once a month
- 6 2-3 times a month
- 7 Nearly every week
- 8 Every week
- 9 Several times a week
- 10 Once a day
- 11 Several times a day

98 Don't know

99 No answer

V60 - Q.28

How often do you take part in the activities or organizations of a church or place of worship other than attending services?

- 1 Never
- 2 Less than once a year

- 3 About once or twice a year
- 4 Several times a year
- 5 About once a month
- 6 2-3 times a month
- 7 Nearly every week
- 8 Every week
- 9 Several times a week

98 Don't know

99 No answer

V62 - Q.30

How often do you visit a holy place for religious reasons such as going to [shrine/ temple/ church/ mosque]?

Please do not count attending regular religious services at your usual place of worship, if you have one.

- 1 Never
- 2 Less than once a year
- 3 About once or twice a year
- 4 Several times a year
- 5 About once a month or more

8 Don't know

9 No answer

V63 - Q31

Would you describe yourself as ...

- 1 Extremely non-religious
- 2 Very non-religious
- 3 Somewhat non-religious
- 4 Neither religious nor non-religious
- 5 Somewhat religious
- 6 Very religious
- 7 Extremely religious

8 Can't choose

9 No answer

V64 - Q32

What best describes you:

1 I don't follow a religion and don't consider myself to be a spiritual person interested in the sacred or the supernatural.

2 I don't follow a religion, but consider myself to be a spiritual person interested in the sacred or the supernatural.

3 I follow a religion, but don't consider myself to be a spiritual person interested in the sacred or the supernatural.

4 I follow a religion and consider myself to be a spiritual person interested in the sacred or the supernatural.

8 Can't choose, can't say

9 No answer

V66 - Q34a, V67 - Q34b , V68 - Q34c, V69 - Q34d

Do you agree or disagree that practicing a religion helps people to ...

Q34a Find inner peace and happiness

Q34b Make friend

Q34c Gain comfort in times of trouble or sorrow

Q34d Meet the right kind of people

1 Strongly disagree

2 Disagree

3 Neither agree nor disagree

4 Agree

5 Strongly agree

8 Can't choose

9 No answer

・それ以外の変数(年齢、性別、収入、母親の宗教の有無は除く)

V14 - Q8a, V15 - Q8b, V16 - Q8c, V17 - Q8d, V18 - Q8e

How much confidence do you have in:

Q.8a [Parliament] <use national legislature, e.g. U.S. Congress>

- Q.8b Business and industry
- Q.8c Churches and religious organizations
- Q.8d Courts and the legal system
- Q.8e Schools and the educational system

- 1 No confidence at all
- 2 Very little confidence
- 3 Some confidence
- 4 A great deal of confidence
- 5 Complete confidence

- 8 Can't choose
- 9 No answer

JP_DEGR - Japan: Country specific education

Please indicate the last school you attended or the school you are currently attending.

- 0 NAP, other countries
- 1 Junior High school completed
- 2 High school completed
- 3 Junior college completed
- 4 Finished university or graduate

- 99 No answer

URBRURAL - Type of community: R.s self-assessment

What kind of community do you currently live in? Circle one figure only.

- 1 Farm or home in the country
- 2 Country village
- 3 Town or small city
- 4 Suburb, outskirts of a big city
- 5 Urban, a big city

- 8 Don't know
- 9 No answer